

探し続ける

2024.7.8

毎日のように文章を書くようになって6年目になる。一念発起というわけで始めたわけではない。何となく自然にスタートした。それが、令和1年11月11日だった。1が5つも並ぶ滅多にない日である。これも、そうなるようにねらったわけではない。始めようかなと思ったタイミングとこの日付がちょうど合っただけのことである。

自分がエッセーを書く上で、憧れている方がいる。伊集院静さんである。「校長室だより～燦燦～」には何度も登場していただいた。「園長通信～こころ～」になってからは、まだ事の次第を説明していなかったことに気がついた。

私と伊集院静さんの文章との出会いは、東北新幹線の車内誌「トランヴェール」だった。あれは、震災直後の平成23年の夏だった。その年の8月1日に職場がかわり、出張で東京に向かう新幹線の中で何気なくトランヴェールを手にした。ページをめくると、そこには伊集院さんのエッセーがあった。読んでみた。涙が出てきた。それからである。毎月発行されるトランヴェールを読むようになった。

さすがに毎月新幹線に乗るわけではない。では、いかにしてトランヴェールを手に入れたのか。職場に新幹線通勤の同僚がいた。毎月1日になると、自動的に私の手元に届くようになった。それは、私とその職場を去った後も続いた。感謝しかない。

自然と伊集院さんの著書も読むようになった。「大人の流儀」という国民的ベストセラーシリーズがある。すべて読んだ。書棚にきれいにそろっている。先週は、職場体験で6人の中学生が来てくれた。「大人の流儀9 ひとりで生きる」の67ページの一節を紹介する。

この頃、若い人に、若い時にどう過ごしたらいいのかと訊かれる。

自分がやりたいことをしなさい、と言うが、

「やりたいことがわかりません」と応えられる。私は言う。

「私も自分が何をやりたいのかずっとわからなかった。それでも探し続ければ、不思議なことに何かとぶつかるものだ。大切なのは探し続けようという意志なのだと思う」

人間の一生などというものは、どこで何が起こるかわからないし、どこで歩む道が見つかるかわからないものだ。

大切なのは探し続ける。信じる。希望を失わないことだ。

私もずいぶんと長く生きてきたが、探し続ければ何かとぶつかるという感覚はある。だが、今でもずっと何かを探し続けている。なかなか見つからない。それでも、希望を失ってはいない。中学生をはじめ若い人たちには、思い悩みながらも、ずっと探し続けてほしい。